

あけましておめでとうございます。今日学ばせていただく所は、お手元のテキストの九頁、「能発一念喜愛心 不断煩惱得涅槃 凡聖逆謗齊廻入 如衆水入海一味」です。現代語訳を含めて一緒に拝読をさせていただきたいと思います。ゆっくり拝読しますのでどうぞお声を十分お出しください。さってお願い致します。

能発一念喜愛心 不断煩惱得涅槃

本願を信じ喜ぶ心が、ひとたびわが身におこるとき、
煩い悩みを断たなくても、
この上ないさとりを得ることができます。

凡聖逆謗齊廻入 如衆水入海一味

凡夫も聖者も、み仏に逆らい法を謗（そし）る人も、
皆、ひとたび自我の心をひるがえして真実に帰入すれば、
様々な川が大海に入って一つに溶け合うように、
いのちのひびき合う世界となるのです。

どうもありがとうございました。

先程は、ご住職様のご導師の元で、「正信偈」のお勤めが大変力強く、朗々とお勤めできまして、本当にありがたいことと思います。今は大変厳しい時代の中で、お互いにこうして、今年一番の寒さの中を集うて、親鸞聖人の熱い、喜び満ちた情熱に触れ、また真実の喜びに触れるということは真にありがたいことであると思うのでございます。

いつものように最初に、今年の年頭において感じましたことを申し上げます。

「生かされて 生きている この不可思議の事実 南無」

私たちが生きておるということは生かされているという事実を立て生きていくわけですね。人間の私擬、計らいを超えて、もう既に事実として私自身の上にこの不可思議の事実がはたらいているということです。

私たちはこの人間に生まれてからということしか感じられないけれども、しかしよくよく考えてみると、お念仏に会い、本願の真実に遇って、いのちの歩みというものをいただくならば、曠劫来のいのちの歩みがあるということを感じます。私という存在の名は誕生からではありますけれども、そのいのちを生み出してきた、歩んできた歴史があるわけです。

そして不可思議という所には、「帰命無量寿如来」という、量り知れないいのちの如来に帰命するという。その無量寿のいのちに目覚めいただく時に、量り知れない生きとし生けるもののいのちの世界に、私もまた誕生したという意味がございまして。私たちが常識的に考えておる人生や、いのちということを超えて、はるかに深い尊いいのちの事実がはたらいておるのです。

親鸞聖人は南無阿弥陀仏という念仏を本当に深くいただかれて、浄土真宗の教えを明らかにしていかれたのでありますが、特に南無、帰命ということにつきまして、大切にされてきました。

「帰命」は本願招喚の勅命なり

(真宗聖典 一七七頁)

年末年始になりますと多くの方々が寺院、仏閣にお参りに行かれることが、年中行事の一つの風俗になっております。

私たちが真宗の教えをいただく時には、お参りして何かを祈祷し、頼むではありません。健康にしてくださいとか、お金に不自由しないようにとか、火事が来ないようにとか、地震が来ないようにとか、そういうことを頼むのではなくして、もう既に大いなるいのちをいただいて生かさせていただいている。このいただきたいのちを私たちはどう本当に生きているであろうか。大きな恩徳に対してどうお応えできているであろうか。親しまれている言葉で言うならば、聴聞こそが本願のおみにりに応えていく姿であろうと。この身の存在が、招き呼びかけられておる。

呼びかけるということは、今の時代において大事な深い意味があります。例えて言えば、断絶とか孤独という状態は、その呼びかけが聞き取れないわけですよ。自分のこんな辛い気持ちが入りにわかりますかと。学校の先生といえども、家族といえども、わかりますかという。それはやはり自分の世界に閉じ籠って、自我心に閉ざされて断絶し、孤独に閉塞していると。

本願招喚の勅命というのは、そういう断絶している孤独の真っ暗闇の底から、存在の底から立ち上げてくる。そういう所に本願招喚の勅命ということは、絶対的に、あらゆる人々を選びなく、十方衆生の中から、一人ひとりの存在の底から呼びかけてくる。それが本願招喚の勅命である。それが南無であると。

この本願招喚の勅命が領けないと、どうしても人間は依頼心。物を頼んだり、力を頼んだり、金を頼んだり、色んなものを頼みますが、それには限界があるわけで永遠性はありません。本願招喚の勅命は、一切の条件を問わず、無条件に存在それ自身に、呼びかけられておるといふ、そういう意味があるわけです。それは不可思議の事実なのですね。理想とか夢とかというものじゃない、不可思議の事実である。

私は、これも教えられている言葉でありますけれども、

「吐く息 吸う息 念仏の息」

これは私たちの胸の中に刻み込まれております言葉の一つに、覚如聖人が親鸞聖人のご生涯を讃えた『御伝鈔』がありますけれども、入滅なさった時に、

念仏の息たえましましおわりぬ

(真宗聖典 七三六頁)

という表現をされておる。呼吸が単なる呼吸じゃない。念仏の息。親鸞聖人の根本の聖教であります『教行信証』の一番初めの総序の中に噫（ああ）という表現があるのです。

ああ、弘誓の強縁、多生にも値いがたく、真実の浄信、億劫にも獲がたし。

(真宗聖典 一四九頁)

阿弥陀の本願には、十方衆生を救い遂げなければ、仏とはならないと。十方衆生、ここにいる私自身が救われなければと、そういう具体性があるわけですね。十方衆生が救われるということは私たち一人ひとりが救われる。目覚めるということなくしては実現しないわけです。決してその他大勢ではない。

多生というのは値遇、値いがたく。流転の歴史の長さですね。これはよくよく深くいのちという

ものをいただいてみると、迷いの歴史があるわけです。

よく実感を交えて申すことでありますが、私自身は、今年で八十一歳と十四日になりました。歳をとって思ふのはね、先立って行った父親の欠点を悉く受けていると。そういう実感がするのですね。そういうことにおいて親子の絆というのは深いなと思うのです。それは生まれてからこのかた、年月で計れないような、人間が生きているということの言うならばいのちの深さ、煩惱の深さ、問題の深さ。それがあつた限り、煩惱を通して仏道に出遇つた喜びというのが深いわけです。単にこの人生において出遇つたってそういうものではなくして、曠劫来の流転の歩みの中で、ついに

出遇うことができたという、そういうような深さですね。それは人間中心に人間を考えたというそういう歴史じゃなくして、それこそ如来の眞実の仏法のはたらきの中で出遇つたという。仏法ということも案外よく申し上げますように、目覚めの法ですね。目覚ませるはたらき。自らが目覚め、他を目覚ましめる。人々を目覚ませてやまないというそういう眞実の法ですね。法ということは絶対に消しがたい。過去未来現在に、はたらいておると。

去・来・現の仏、仏と仏と相念じたまへり。

(眞宗聖典 七頁)

という言葉が、『大無量寿経』の中にありますが、過去未来現在。現在の深さに量り知れない過去があり、量り知れない未来を孕んでいる、そういう現在であると。だから私たちが生きておる現在は、曠劫来の過去を孕み、無限の未来を孕んでいる。そういう命が具体的には、「吐く息、吸う息」の上に現れている。止まったら永劫に帰ってきません。今、私の身体を通して、ふう、と吐いて吸う息は、一瞬一瞬が限りなく尊い。そういうことを親鸞聖人の命終にあたって、覚如聖人は「念仏の息たえましましおわりぬ」と。もう私たちの上に南無阿弥陀仏の念仏の息が生きてはたらいている。具体的には親鸞聖人の生き様を通して教えられるということでもあります。

眞の信心はですね、如来の眞実の浄信から開かれてくる信心。尊い信心は億劫。果てしない歴史を貫いて、遇いがたく獲がたい。そういう信心をいただいで生きているのであると。その感動を親鸞聖人は、ああと、こう表現しておる。もう感動の極地のような表現ですね。喜びがあるのは勿論ですが、そこに深い悲しみがある。悲喜がこもっておりますね。これはやはり人間が生きていることに、親鸞聖人は

悲喜の涙を抑えて

(眞宗聖典 四〇〇頁)

ということを言われますけれども。法然上人と遇つて、そして念仏の教えに遇い、浄土眞実の教えを生きる、お念仏者として生きることができる、そういうことを、感動を込めて、『教行信証』の最後に記されております。何故悲喜ということがあつたかということ、人間の現実、煩惱熾盛、罪惡深重、そういうことを通して、その煩惱の身、罪惡深重の身の底の底まで徹底して照らして、目覚ませてやまないという如来の大悲。

そしてそこに計りなくも法然上人に出遇い、その教えを賜つたという法然上人を通して、本願眞実の教えに出遇つたという。そこに人縁、法縁ということが本当に尊い。金子大栄先生から頂きました言葉で、

「人縁を転じて法縁となし。法縁によりてさらに人縁の深きを思う」

例えば結婚するということは人の縁ですね。ただ結婚するだけじゃない。結婚ということにおい

てお互いに人間として出会う。仏法を聴聞して共に仏弟子として出遇っていく。だから仏法の世界では、家庭の中の人間のいざこざというものを拒否するものではないのですよ。それが縁となるということなのです。

それをはっきりと経典で表わされているのは『観無量寿経』ですよね。王舎城の悲劇という。教養のある家庭において、王様夫妻に子どもができて、家庭生活のある所には、問題が起こると。その問題が浄土を開いていくかけがえのない大事な意味を持ってくるという。人の縁がどれだけ深いかということ。私という存在がこの世に存在したと。生まれたということがどれ程大きな意味を持っているか。歩んでくる家庭の中では生まれて来なければ良かったということも思っても、出遇えば、なんとまあ尊いことであるかという、そういう生き方が開けて来るということでもあります。

それからですね、これは年頭において感じたことなのですが、去年こういう俳句に出遇いました。

「九十代 五人並んで ひなたぼこ」

凄いい句ですね。九十代の方が五人並んで日向ぼっこをしていると。東京の池田さんという方なのですが、凄いなと思って。九十代。親鸞聖人のご承知のようにお亡くなりになったのは九十歳ですよ。私はこの句を読んで、果たして一人ひとりはどういうふうな人生をいただいておられるのであろうかということを感じました。私も歳を重ねて参りまして知らされることは、歳を重ねていくということは大変なことだ。しみじみと考えさせられるということがございます。

九十代の方が五人並んでひなたぼこ、ということは寝たきりじゃないわけですね。寝たきりの方も沢山いらっしゃるわけですが、大変なことだと思えますね。長寿社会ということは、いわゆるおめでたいことばかりではなくてね、そこには人間の深い悲しみの現実ということが孕まれているということではないかと思えます。

そういう悲しみに出遇っても出遇っても、生きておるといこと、生かされて生きているという。これがこの不可思議の事実という。そういうふうな受け止めができるかできないかということは、一人ひとりの人生の大問題だと思えますね。そしてそういうことを思います時、先立って行かれた量り知れない方々が、そういう人間の問題を生きていかれたのであるなということが教えられていきます。それによって、私がどう、私たちがどう生きていくかということが、絶えず現在の問題として問いかけられているのだと教えられることとございます。

それで「正信偈」のほうに帰りますとですね、

「如来所以興出世 唯説弥陀本願海」

如来、世に興出したまうゆえは、ただ弥陀本願海を説かんとなり。

「五濁悪時群生海 応信如来如実言」

五濁悪時の群生海、如来如実の言を信ずべし。

(真宗聖典 二〇四頁)

これは釈尊がこの世に現れてくださった本懐であると。ただ弥陀の本願海を説かんとという、ここに唯説という言葉があります。

「唯」は、ただこのことひとつという。ふたつならぶことをきらうことばなり。

(真宗聖典 五四七頁)

これは親鸞聖人が『唯信鈔文意』というお聖教の所で述べられておりました。

また「唯」はひとりというところなり。

(真宗聖典 五四七頁)

『唯信鈔文意』の注釈を見ると唯説の唯というのはそういう意味があることを知らされるのです。

如来、世に興出というのは出てくださると。人間の世界の問題が深く広い。五濁というのは、劫濁、見濁、煩惱濁、衆生濁、命濁とあります。

劫濁というのは時代ですね。時代そのものが本当に問題を孕んでいるということですね。

見濁は人間の考え方。知性や頭脳は科学的にも文明的にも進んでいるけれども、問題がかえって深まっているという問題があるわけですよ。

煩惱濁は人間が道具になったり、物になったりする。これは深刻な問題ですね。使い捨てということがありますね。人間の使い捨て。煩惱というのは便利になってきて少なくなってくるかということ、ますます激しくなってくる。

衆生の間には不信感と言うかバラバラということが出てくる。人間の肉体の命は長生きしているけれども、意味があるかと申しますと、意味が感じられないような人生、そこに命濁という問題を押さえて、五濁悪時の群生海、如来如実のみことを信ずべしという。如来の如実の真実のみことを、本当に信ずるといふ、そういう道を、勧めてくださっておると。

これは仏陀釈尊の出世の非常に深い意味であり、御恩であります。そのことによって

「能発一念喜愛心 不断煩惱得涅槃」

よく一念喜愛の心を発すれば、煩惱を断ぜずして涅槃を得るなり。 (真宗聖典 二〇四頁)

という。真実の信心が起こると、歡喜。喜というのは本当の意味の喜び。愛樂というのは本当の意味の愛おしみという。歡喜、愛樂。願うとかですね、あるいはまた共愛とも言いますが。命を本当に愛おしんで、大事にいただいているかと申しますと、どうでしょうか。

私も本当に一日一日大事にしているかと申しますと、むざむざということと言わざるを得ない。しかしそれが駄目なのかと言うと、そうではありません。むざむざと生きているなということを知られる所に悲しみがあるわけですね。それにおいて改めて一日一日を知らされると。新たに出遇う。人間はプラス面、喜びの面だけで出遇うのではありません。やっぱり存在を挙げて出遇う。まさに五濁悪時の群生海。問題存在であるからこそ、群生海ということのですね。

私たちはバラバラで生きておるわけですよ。バラバラですね、群生海は。バラバラでいっしょって何年か前に真宗大谷派で標語を出しましたね。

「バラバラでいっしょ。差異（ちがい）を認める世界の発見」

バラバラでいっしょということが大変な言葉ですね。そこにはバラバラでいることの悲しみがありますね。同じ命を生きておるのだという。これは「正信偈」の中に歌い込まれておるわけですが。差異を認める。だから一念喜愛の信心が起こるといふようなことは、バラバラでいっしょという。差異を認める世界の発見。これは浄土というはたらきをね、表現していると思いますね。浄土に触れて初めて差異を認める世界が戴かれると。非常に現実生活に徹底している意味がございます。

私たちが聖教に遇う、「正信偈」に遇うということは、この生活自身が開かれていくという意味がありまして、よく一念喜愛の心が発すれば、煩惱を断ぜずして涅槃を得るなり。これはね、人間

中心の、人間の心、力、そういうものを頼む生き方になると、聖道門になると、煩惱を断って、涅槃を得るという在り方になるわけです。自分がやってみればね。とてもじゃないけど煩惱を断つことはできない。だから道を歩むことにおいて、凡夫をはっきりするという。人間の現実を発見するという、そういう大事な意味があるかと思えます。

そこに煩惱に生きる他ない。『歎異抄』の第一章に言われておりますように、煩惱が熾盛、燃え盛るようにね、止むことがないと。夢にまで見ると。身体全体が煩惱の巣窟であると。その煩惱の身を深く知り、悲しみ、そこに意味を見出しめるのが阿弥陀如来の大悲である。阿弥陀の本願であることが、はっきりと教えられる。だから煩惱を断たずして煩惱のあるままに尊い人生の意味を見出していくことが出来るという。

以前、悲しみの恩恵ということを申し上げましたが、悲しみは悲しみだけで終わるものではない。そこには悲しみを通して、知らされたという。例えば大事な親や連れ合いを亡くす。これは耐えがたい悲しみですね。その悲しみを通して、存在の尊さ、存在してくださった。そのことが本当に尊いという。そういう出遇いを、消えることのない出遇いを教えられたということがあります。

そういう悲しみは煩惱から起こってくるのであります。したがって煩惱ということがね、非常に大事な意味のあるものだと教えられます。だから「不断煩惱得涅槃」なんてこの言葉はね、大変な。これはもうあらゆる人間存在に呼びかけられている、そういう言葉ですね。そこにはやはり「能発一念喜愛心」という一念の真実の信心が起こるということがなくてはね、そういうことに気が付かない。如来の真実のはたらきに触れるということにおいて、ああ、なんとまあ大事な道をいただいているかということに初めて目覚めていくと。

今日は「凡聖逆謗齊廻入 如衆水入海一味」。親鸞聖人ご自身が「正信偈」を作られて、「正信偈」の言葉について『尊号真像銘文』で注釈をしておられるのですね。親鸞は、『尊号真像銘文』を八十六歳の時に書いておられるのです。私自身が今、八十一歳になってみてね、凄いなあと思われます。

その注釈に、

「凡聖逆謗齊廻入」というのは、小聖・凡夫・五逆・謗法・無戒・闍提みな回心して、真実信心海に帰入しぬれば、衆水の海にいりて、ひとつあじわいとなるがごとしとたとえたるなり。これを「如衆水入海一味」というなり。
(真宗聖典 五三二頁)

小聖というのは小乗の聖人。小乗の聖人ということは、覚りを得ても、自己本位の個人的な救いになるということです。これは私たちが仮に信心をいただいたと言いましても、個人的な救いになるという、そういう問題があるわけですね。信心をいただいて自分だけが得意になったり偉くなったりするようなことは、信心がこの十分でない。信が不具足であるという問題があるわけです。

頻婆沙羅王なんかは凡夫を表しておりますね。煩惱に縛られて迷っている人間存在、縛られている人間存在ですね。これは金子先生がおっしゃったことの中で印象に残っているのでありますが、

「愛妻愛子、これを凡夫という」

非常に具体的でしょ。凡夫ということはただ人ということであって、煩惱に縛られている存在であります。具体的には妻を愛し、子を愛すると。それを絶対化するということもありますし、また、愛している時は良いけれども、憎しみに変わることもあります。戦中戦後のような物のないときは、人様がどうであれ、我が妻、我が子だけは、養いたいということが出てくるでしょ。だから非

常に凡夫というのは生々しい人間の現実そのもの。リアリティーがあるわけですよ。経典に出てきているようなそんな話というそんな程度じゃなくして、人間の生き様そのものが、私自身の生き様そのものが凡夫を離れてあるかという。だから凡夫という発見は、非常に大きな発見ですね。

五逆というのはご承知のように、父を殺し、母を殺し、道を求める者（阿羅漢）を殺し、和合僧を破り、仏身の血を出すという。これもね、よき人の元に集うて、御同朋御同行の喜びを交わり開いている中にですね、異を唱えるようになってくるわけですね。それはおかしい、間違っているとかなですね。『歎異抄』の中には異義を唱えてね、自分の所に引っ張っていこうとするような、そういう姿。自分が集団の中心になろうとするような。物欲があるがゆえに仏法を生み出すという、そういう問題があります。

そして父を殺し、母を殺す。これね、他人事のように思われるかもしれませんが、私においてはそうではありません。いわゆる青春時代のことを思うとね、何で親たちは勝手に俺なんかを産みくさったのかと。頼みもしないのに産んでくれてと。これも立派に父を殺し、母を殺していることになるのですよ。そういうことがございませんか。じっと胸に手を当てて考えてみる時に、一〇〇%、一二〇%、生まれて良かったと思われませんか。思われる方もおられるし、おられて差し支えないと思うのですが。だから人間は生きるという問題をね、本当に深く問うて。

それから仏身から血を出だすという。出仏身血という。仏様の御身をですね、傷付けるという。傷付けるというのは蔑ろにすることです。例えて言えばこの現代の生存競争の厳しい時代に仏法なんか聞いて役に立つものか。あんなものは暇な人間のやることだと。これはどうですか。己の世界に、自我関心に人間地に閉じ籠って、本当に大事なことが見えない。見えていない。そういう問題ですね。五逆ということは小乗の五逆と大乘の五逆ということがありますが、人間が生きる所に起こってくる閉塞性、罪悪性の問題ですね。

それから倒見して和合僧を破るといふ。倒見ということもね。さかしまに考えているということがある。金は大事ですよ。金が第一に大事かということ、そうは言い切れませんよ。金があろうとなかろうと、命を失うということがあります。もっと言えば、金が大事だということにおいて、むざむざと金の奴隷になるということがある。名誉や利権の奴隷になるということがあります。私は政治の世界にはそういう倒見。まあ政治の世界だけじゃありません。人間の生き方には倒見ということ非常に根が深いと思いますね。暇になってから聞こうっていうのでは間に合わないのですよ。蓮如上人が言っておられますように、仏法のことは急げ急げと。

朝（あした）には紅顔あって、夕べには白骨となれる身なり。 （真宗聖典 八四二頁）

朝は生き生きとした顔をしていても、夕方には白骨となれる身であると。無常であると。無常迅速と。今日も一年が早いですねという話がありましたけれども、無常迅速ですよ。疾風怒涛のように早い。だから暇が出来てからじゃ間に合わないのです。間に合わないのだけどね、悲しいかな、人間の中にある性というか傾向性がね、非常にあるわけですよ。聞法はそういうことを教えてくださいという所に、私は大事な意味があると思うのですね。

それから先程申しました、出仏身血ということは、損心。親鸞聖人をねたんでね、殺そうとした山伏弁念という存在がありますけどね。私たちの日常生活の中でも、中々人様の喜びを喜ぶということが難しいという問題があります。悲しみはある程度悲しむ。徹底的に悲しむということも大変ですが。人様の喜びを喜ぶということは中々困難だということがありますね。嫉妬心が入るとかね、比較してしまうとか。相手はうまくやりやがってとかね。だからこの非常にリアリティーがあるわけですね。凡聖逆謗、小聖・凡夫・五逆という所にはそういう人間存在の、離れられない問題性で

すね。

それから謗法というのは仏法を謗るということです。仏法を謗る。『観無量寿經』に出てくるもので言えば、提婆達多ね。釈尊のいとこだと言われておりますけれども。阿闍世という太子を取り込んで、頻婆沙羅王を殺そうとする。そしてうまい汁を啜ろうとするという、提婆ということが象徴的に言われますが、これはね、私たち人間の生き様から言うと、親鸞聖人はですね、善知識をおろかにおもうと。これは『御消息集』の中にあるのですが。

善知識をおろかにおもい、師をそしるものをば、謗法のものともうすなり。

(真宗聖典五六五頁)

こんな大変な時代に仏法の話聞いたって何になるのかと。そういうのが謗るですよ。だから無意識の内に、気が付かない内に謗法に、法を謗る。これは中々気が付かないわけです。仏法を聴聞し、念仏生活をさせていただく中で、謗法の身だということが知らされる。それから

親をそしるものをば、五逆のものともうすなり。同座をせざれとそうろうなり。

(真宗聖典 五六五頁)

親を謗るものがね、五逆。非常にはっきりしているでしょ。自分の親なんか大したことないのだと。俺は親を超えたのだということになるとね、それは傲慢ですよ。どのような親であろうと、その親なくしては私という存在はないということではないでしょうか。いつの間にかね、いささか良いことをしたからといって、親より偉くなると。これは人間の傲慢であるということでしょうね。だから人間が生きるということの根本問題をね、挙げているわけですね。

そして無戒ということは戒がない。戒があっても保たない、戒がないがごとしと。今の人間の生活は、宗教者を含めて無戒ということがわたるような。人間が守らなければならない大事な戒律として五戒ということがありますよね。在家の人が守るということで。それは殺生してはならん、盗みをしてはならん、よこしまな男女関係を持ってはならない、嘘を言ってはならない、酒を飲んではないと。それが五戒としてあげられているわけですが。多くの場合こういうことが問題にすならないというふうな状況があるわけです。そこに痛みがないという。

その後に出てくるのが闍提、一闍提。この逆謗闍提ですね。闍提なんて言葉は非常に大事な意味の深い言葉です。闍提はですね、イッチャンティカという音で写して一闍提という漢字で表わしているわけですが。意味を和訳すれば、欲求しつつある極欲。断善根。信心がない、そういうものが一闍提。私はこの言葉に触れるとね、自分がそうじゃないかと。現代人がね、そういう欲望の虜になってね、極欲なんて生々しいじゃないですか。断善根という。こういうことがね。だから凄いことをね、人間を見つめる眼がね、非常に深い。人間が見つめる眼が深いということはね、暇だから言っているのではないですよ。本当に生死無常。いつ終わるかわからない命ではありませんかと。その命をむざむざ生きていいですかと、むざむざ死んでいいですかと。そういう火急の、足元の問いですね。

仏法の問いは私いつもそうだと思います。暇があるから聞くっていう話ではないのですよ。火急のいのちのかかった、自分自身の足元の問い。この欲望の虜になっていないかと。これは個人の生き方がそうであるし、現代における人間の生き方がそういう問題ですね。だから「凡聖逆謗齊廻入」というのは、本当に人間の生き様を具体的に表わして、このような人を見捨てるのではなくして、信心をいただいてですね、真実信心海に帰入しぬれば、衆水の海にいらて、ひとつあじわいとなる

がごとしというのは、沢山の川が大海に注ぎ込んでね、そこで一つの大きな大海の味わいになるということなのです。この私の現代語訳では、

凡夫も聖者も、み仏に逆らい法を謗（そし）る人も、
皆、ひとたび自我の心をひるがえして真実に帰入すれば、
様々な川が大海に入って一つに溶け合うように、
いのちのひびき合う世界となるのです。

いのちのひびき合う世界ですね。いのちがひびき合うというのは、民族が変わり、国が変わり、言葉が変わり、色んな違い、条件の違いがあってもですね、人間の本当に深い喜び悲しみにおいて、命の本当の尊さにおいてひびき合う。共感し合うと。違いを超えてね、差異を超えてね、みんなが判で押したように一緒になるということではありません。

阿弥陀経の中に青色青光、黄色黄光、赤色赤光、白色白光という言葉があります。それぞれがそれぞれのものとして光りながら、輝きながら溶け合うという。その人にはその人の存在の尊さがあって、それがお互いに輝きながらひびき合って生きていくという。不協和音に終わらないと。どのような違いであっても、お互いに。これは当相敬愛というような、素晴らしい言葉が。当に相、敬愛。敬い愛しむという。尊敬すると。敬うということが非常に私は現代人の欠落している面じゃないかと思います。そしてそれを愛する、愛しむ、本当に愛しむという。

悲喜共同と言う言葉があります。悲しみと喜びは本当に共にすると。地獄の底までというね。親が本当に子を愛するという時はやっぱり地獄の底までということではないですかね。そういうものは人間の作意を超えて、表れる時には表れるということがあるのですが。

凡聖逆謗というところには、みな回心してという。これは肝心要ですね。回心して。回心というのは自力の心を翻して、自己中心の、自我中心の我が身、我が心、我が力、我が様々な善根を頼む、依頼する心を翻してですね、如来の真実に帰するという。これが回心。回心ということはただ一度あるべしという。それは人間の立場から仏様の本願を中心にする世界に転換すると。

よくいう言葉でいえば、相対有限が依り処じゃなくして絶対無限のはたらきが依り処であると。如来の真実こそが依り処であると。だから回心ということは一度ということが言われるわけですね。その回心が謗法闡提の上に、凡聖逆謗の上に起こると。優しい言葉で言えば、目覚めることが呼びかけられていると。ああ自分は立派なことを言っていたけれども、自己中心であったじゃないかと。餓鬼と同じであったじゃないかというそういう自分の姿に気付かされる。思い切って表現いたしますと、人や世界が本当に見えるようになるということです。信心をいただくということが自分の上に起こってくると、ああ、あの人はずっと悩んでいるのではなくして、人として生きる道を本当に求めておられるのだなど。人間が人間として見える。道を求める人として見えるということじゃないですか。

これは如来の眼が私の上に開かれてくるということですね。如来の慧眼。智慧の眼。如来の眼が開かれると。仏眼がですね、如来の眼が開かれる。それほどこまでも如来の真実の眼であって、私の所有するようなものではありません。私の上に開かれる。私自身が照らされることにおいて、人々が見えてくると。罪悪深重の我が身ということが知らされた時に、ああ人様は皆重い深い問題を抱えて生きておられる人々だなあという、そういう苦しみ悩んでいる私だけですってそんなちやちやなものではないのですよ。言葉を変えて言えば、人々が悩んでおることが、いかに自分が聞かれていないか、見つめられていないかということに気が付いていくということではないでしょうか。

これは例えて言えば教育という現場でそういう目が開ければね、大違いですよ。この子は、言っ

でも言ってもわからん駄目な子だというふうに高飛車に決めるのよね、この子の持っている悩みは私にはまだ聞かれていないな。申し訳ないけれども私には理解できていないと。本当に聞かなきゃならないというふうな眼が開かれるということは大違いです。だから人間が生きていく上でなくてはならない眼が開かれてくるということですね。

これは善導大師のお言葉なのですが、

仏の願力をもって、五逆と十悪と、罪滅し生を得しむ。謗法・闡提、回心すればみな往く、と。
(真宗聖典 二七七頁)

仏の本願力をもってですね。十悪というのは身口意の三業。殺生（生き物を殺す）、偷盜（盗みをする）、邪淫（よこしまな関係を持つ）、悪口（悪口を言う）、両舌（二枚舌）、妄語（嘘をつく）、綺語（おべんちゃら）。それから貪瞋邪見。貪欲（むさぼり）、瞋恚（怒り）、邪見（無明）。貪瞋痴。これが十悪なのですよ。五逆十悪が、信心をいただくということにおいてですね、翻されてですね、謗法闡提回心みな往くと。これは善導大師が非常に人間ということを深く悩まれ追及された方あります。謗法も闡提も、回心をすれば、真の信心を得れば、みな往くというのは、往生浄土の道を歩くという。現代語で言えば、本当に開かれた世界に向かって生きていくことができる。往生浄土の道を往くということ。往生浄土の道というのは本当に生きていくことができる。本当にいのち終わっていくことができる。人生を果たし遂げていくことができる。

謗法闡提回心皆往というようなことがね、言われておりまして、親鸞聖人はそういうことを教行信証の中にも引かれておるのであります。これは『大無量寿経』の中に説かれております、本願を説いた経典の中の第十八願、根本本願と言われますが。

設い我仏を得たらんに、十方の衆生、心を至し信樂して我が国に生まれんと欲うて、乃至十念せん。もし生まれざれば正覺を取らじと。ただ五逆と誹謗正法を除く、と。

これが第十八願なのですが、これは信巻にですね、引かれておりましてですね、至心信樂の本願の文として、

『大経』にのたまわく、設い我仏を得たらんに、十方の衆生、心を至し信樂して我が国に生まれんと欲うて、乃至十念せん。もし生まれざれば正覺を取らじと。ただ五逆と誹謗正法を除く、と。
(真宗聖典 二一二頁)

今申し上げたいことはですね、この第十八願の根本本願の中に、「唯除五逆誹謗正法」という言葉があります。これは唯除の文。第十八願の根本本願は十方の衆生が、如来の眞実信心をいただいて、至心に信樂して我が国に生まれんと欲うて、乃至十念せん。もし生まれずんば正覺を取らじと。如来の眞実信心、至心信樂欲生をいただいて念仏して浄土を願う時に、皆浄土に生まれるとなるということが本願において誓われている。そこにただ五逆と正法を誹謗せんとは除かんという。この者は除くという言葉が誓われている。書かれているわけです。

私はこのことが学生時代は何でみんな救うといいながら除くと言われておるのかというようなことが疑問だったのですが、高倉会館の日曜講演である先生がですね、佐々木先生という方ですが、親鸞聖人のお言葉を『尊号眞像銘文』の言葉をおっしゃってくださって、なるほどそうかと、教えられたことが忘れられないんですが。

「唯除五逆誹謗正法」というは、唯除というは、ただのぞくということばなり。五逆のつみびとをきらい、誹謗のおもきとがをしらせんとなり。このふたつのつみのおもきことをしめして、十方一切の衆生みなもれず往生すべし、としらせんとなり。（真宗聖典 五一三頁）

そういう親鸞聖人の御注釈があるのです。これは驚きましたね。ただ五逆と正法を誹謗せんとは除くというのは何故そういう除くと言われておるのかということ、五逆と謗法の罪の重いことを示してですね、十方一切の衆生みなもれず往生すべし、としらせんとなり。だから五逆、謗法の罪がいかに重いかということを知覚せしめて、自覚を促して、往生浄土の道を開くと。往生せしめたもうというそういう心なのだということを知らされているのですね。このことを教えられて本当にそうかという感銘を覚えたことが昨日のごとしと、そういう感じがするのでありますが、この「正信偈」の一段を読みますと、本当に遇いがたくして出遇うことができている、できつつある、またそれは本当に出遇っているのかと言えるのかという問いにもなるのでありますが、そういうことを教えられて、深いご縁だなということを知らされるのであります。時間が大分経ちましたが、話の方はこれで終わらせていただきます。どうもご静聴くださいましてありがとうございました。